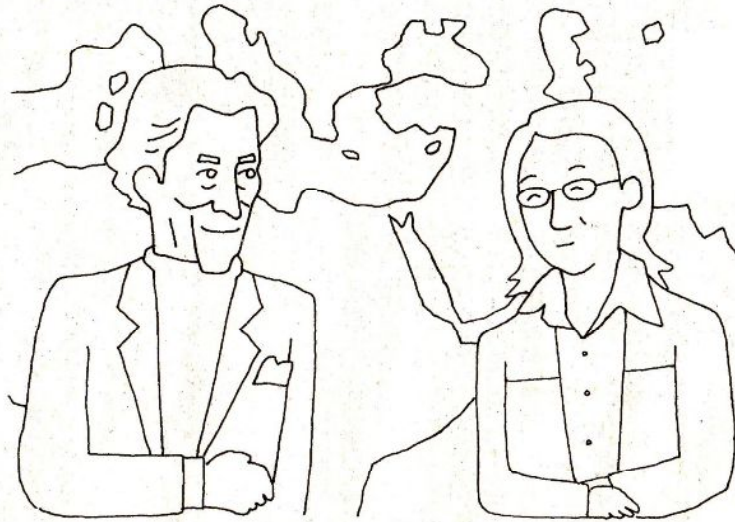


工藤 庸子・選

エドワード・  
W・サイード

和田 誠

- ①パレスチナへ帰る (サイード著/四方田犬彦訳/作品社/2000円)
- ②オリエンタリズム・上下 (サイード著/今沢紀子訳/平凡社ライブラリー/各1553円)
- ③戦争とプロパガンダ (サイード著/中野真紀子・早尾貴紀訳/みすず書房/1500円)

毎日新聞 03(H15).10.26

一九九二年、重い病を得て死を予感したアラブ系知識人が、四十五年ぶりに、生まれ故郷のパレスチナを訪れた。

イギリス委任統治下で国教会の洗礼を受け、エジプトに亡命し、米国にわたって市民権を得たサイードは、その錯綜した履歴ゆえに、ひとりの異邦人として、様変わりした祖国の土を踏む。今はイスラエル領になっている生家の周辺と、武力によって封じられたヨルダン川西岸やガザを行脚するのだが、それは障害にみちた旅だった。歩行し移動することの、そして同胞の声を聞き対話を交わすことの、想像を絶する困難さ。『パレスチナへ帰る』は、透徹した知性と身体感覚に裏打ちされた現場報告だ。

四半世紀前に書かれた名著『オリエンタリズム』は、むしろ予言的な文明批判として再読してみよう。当時、西と東の対立といえは、共産主義と資本主義の相克を指していた。今、世界の分裂は、文明と宗教の対立として語られる。

何世紀かにわたり東洋は、西洋による抑圧ゆえに沈黙を強いられ、主体性を剥奪されてきた。その東洋を立脚点として、サイードは西洋の倨傲を告発し、知と権力の癒着を分析したのである。

『戦争とプロパガンダ』の巻頭論文は、二〇〇一年九月十一日の直前に執筆された。あれ以来、超大国の権力の頂点から、非西洋世界にひそむ悪を告発する声が、絶え間なく響き、地球をおおうメディア網が、忠実にそれを伝達しつづけている。

一極化する世界のなかで、沈黙を強いられ非文明の刻印を押されたアラブとムスリムについて、アメリカ国内で醸成される恐怖と熱狂について、イスラームをめぐる認識の誤謬について、サイードの発言は果敢につづけられた。

九月二十五日、その声は沈黙した。

しかし語られた言葉は、翻訳と注釈という誠実な知の営みのなかで、新しい生命を得るだろう。